

SHIMANE RED DATA BOOK 2026

選定種の解説

概説

哺乳類

1. 野生動物の保護

野生生物種の「保護」には、種そのものの保存と、生態系構成要素としての種の保存が考えられるが、種の保存には人為をまったく排除した厳正保存の他に適正な人為管理も含まれる。特に、日本のように国土が狭く人間による自然の利用率が高い国においては、自然にまったく人為的影響を及ぼさないで厳正保存することは不可能であるし、原生的自然がほとんど無く、部分的または大部分が破壊されてしまっているような自然を保存維持しようとするれば、破壊された部分を人為で補わざるを得ないことも生じてくる。

例えば、ニホンオオカミは我が国の陸上生態系における最高次の消費者としてシカやイノシシなどの大型植食動物を捕食し、結果として彼らの極端な増殖を抑え、生態系全体が急激に大きく変動するのを抑制する役割を果たしてきた。ニホンオオカミが絶滅した今、シカやイノシシの激増を抑制する自然的な要因は、激増した植食動物自身の過食等による植生破壊に伴う食物不足や伝染病の蔓延などである。今や、ニホンオオカミに代わって捕食者の役割を担うことができるのは、人間か、人為的に導入されたニホンオオカミに近縁の別亜種オオカミしかないだろう。とは言え、人間が管理できる自然の範囲と内容には限界があるし、別亜種オオカミの導入に合意を得ることは非常に困難と思われる。

「種の保存」と「生態系の一員としての種の保存」とは本来同じでなければならないが、現実はずしもそのように考えられてはいない。ニホンオオカミ・ニホンカモシカ・ホンシュウジカ・イノシシ・ツキノワグマなどの大型哺乳類は、生態系の中で重要な生態的地位を担っている「鍵種」であり、それらの消滅によって他の種に与える影響は大きい。

全国的には絶滅の恐れがない種でも、既にその種が消滅してしまっている地域はたくさん見られる。そのような地域の生態系に、消滅してしまった種を復活させることなど現実にはまったくと言っていいほど為されていないし、それを行うかどうかの議論もかみ合わないことが多い。絶滅した種に代わる近縁の種を導入することについては、なおさらである。

種は、形態だけで存在するのではない。その生息する環境の中で、環境から及んでくる諸々の刺激に対して主体的に反応し、生活し、進化できて初めて種として存続できるものである。野生動物の保護は、飼育下に置かれたり、個体群の生活場の広がりや種の地理的な広がりよりもずっと狭い範囲に閉じ込められた状態では、完全には行い得ないということである。生息範囲を限りなく狭めつつ、その中で生息適正頭数を云々することは、種の保護にはならない。また、陸上を歩行移動する哺乳類では、特に小型の種の場合、ダムや道路などの建設物によって生息域が分断されてしまい、分断された集団の間での交流ができなくなってしまう恐れも生じる。哺乳類の場合、行動が個体の経験や他個体との交流によって成立する部分が多くあって、自然の環境から引き離されて飼育下に置かれた状態では、例え形態的には完全に見えても種として備わっている性質を「正常」には発揮できないだろうし、やがては野性を喪失してしまうだろう。もしかしたら、人間活動の影響が地球上の隅々にまで及んでいる現在においては、人為的影響を全く受けることのない野生生物などいないのかもしれない。

ない。

野生動物を見て「かわいい」と感じるのは間違いではないが、野生動物には野生動物それぞれの種類ごとの性質や生き方があり、ペットに対する接し方は通用しないことが多い。動物には、種ごとに、また個体ごとに「逃走か、攻撃か」の臨界距離があるため、近づきすぎると攻撃されることがあることを知るべきである。

2. 島根のレッドデータ哺乳類

現在、本県で確認されている野生哺乳類は、食虫目6種・翼手目10種・霊長目1種・兎目1種・齧歯目13種・食肉目9種・偶蹄目2種の合計42種である。このうちヌートリア（齧歯目）とチョウセンイタチ（食肉目）、アライグマ（食肉目）、ハクビシン（食肉目）の4種は外来種である。ここには、ノネコ・ノイヌなどアライグマ以外のペットの野生化したものは含まれていない。ニホンアシカ（鰐脚目）・ニホンオオカミ・ニホンカワウソ（以上、食肉目）・ニホンカモシカ（偶蹄目）の4種は、現在の島根県で見ることができないので、上記の生息種数に含めていない。一方、樹洞を利用する翼手目は、今後、何種か見つかる可能性がある。また、県央で採取された標本から、本県にヒメヒナコウモリが生息している可能性が生じた。

かつて、本県にもニホンオオカミ・ニホンアシカ・ニホンカワウソ・ニホンカモシカが生息していたが、ニホンオオカミは恐らく江戸時代末に、ニホンカワウソとニホンカモシカは明治時代から昭和時代の間に減少し絶滅した。これらは本県では絶滅種に指定されている。

ニホンアシカはクジラ類とともに海生哺乳類に含められるが、近年になって地球上から絶滅した哺乳類である。脂と肉・皮を得るためと、漁網に掛かった魚を食害し漁網を破る害獣として、主要な繁殖群を中心に幼獣も含めて捕獲（殺）を繰り返し行ったことが「絶滅」の大きな原因になったと思われる。また、近代的な漁法による魚類の大量漁獲が、ニホンアシカの食糧難を引き起こしたのかもしれない。韓国では近年でもアシカらしい鰐脚類の目撃例があるが、これがニホンアシカかどうかの確認はできていない。

いずれにせよ、この数千年間における「絶滅」の大部分が人為的な原因によるものであり、このような絶滅は今後も起こりうるものである。特に、害獣とされるものは、保護が困難な場合が多い。

ツキノワグマは、本県では以前は絶滅危惧類に指定されていたが、今では隠岐以外の県内全域で目撃されるほど増加している。日本の本土地区（本州・四国・九州）で最大の肉食動物であり、人が襲われる事故が時々あるので「肉食猛獣」のイメージが強いが、実際には植物食中心の雑食動物であり、「人を食べるため」に襲った例はほとんど無いと思われる。しかし最近では、住宅地などでも人的被害が発生するなど、全国各地でツキノワグマによる被害が多発しており、生息個体数が急増しているように見受けられる。人間に危害を及ぼす可能性のある個体は駆除することも必要だろうと考える。

本県の準絶滅危惧種に取り上げられている哺乳類は、「情報不足」に入れてもよいようなものや、今すぐには絶滅の恐れはなく、

種類によっては今後増加する可能性のあるものも含まれている。

洞穴性のコウモリ類（翼手目）の場合、多くの種は現時点では激減する恐れは少ないが、特定の洞穴に集団で休息や冬眠・繁殖を行うという性質を有することから、このような洞穴環境が消失したり悪化すれば、そこを利用している数百、数千頭（ユビナガコウモリの繁殖群の場合は数万頭）というコウモリ類がいったんに失われてしまうことになる。また、翼手目や食虫目は大量の昆虫を食べるので、生物濃縮による農薬の被害も考えられる。特に翼手目の場合、食虫目などと比べると寿命が非常に長く（20年近く生きるものがある）、それだけ殺虫剤などの農薬が体内に濃縮蓄積される率が高くなることも考えられる。

ホンシュウジカは、江戸時代末期頃には県下全域に広く分布していたが、明治時代以降、恐らく乱獲によって次第に減少し、昭和時代の中頃にはほとんど島根半島だけに残り残された状態になってしまった。一時期、生息数が極端に減少し絶滅が心配され

た時期がある。このような歴史を持ち、他の個体群から遠く離れた孤立個体群であるために、本県では準絶滅危惧種にランク付けされていたが、捕獲制限が功を奏し、かなりの数に増加している。また、現在では、島根半島以外の場所での目撃例が増え、捕獲例もある。そのため、この度、ランク外とした。

本概説の目名、科名、学名は、基本的に、川田ほか（2021）によった。

（大畑純二）

参考文献：

川田伸一郎・岩佐真宏・福井 大・新宅勇太・天野雅男・下稲葉さやか・樽 創・姉崎智子・鈴木 聡・押田龍夫・横畑泰志. 2021. 世界哺乳類標準和名リスト2021年度版.URL : <https://www.mammalogy.jp/list/index.html>

哺乳類掲載種一覧

計21種

絶滅 (EX)

- ニホンオオカミ
- ニホンアシカ
- ニホンカワウソ
- ニホンカモシカ

計4種

準絶滅危惧 (NT)

- ◇ニホンリス
- コキクガシラコウモリ
- キクガシラコウモリ
- モモジロコウモリ
- ユビナガコウモリ
- テングコウモリ
- コテングコウモリ
- ↓ ツキノワグマ
- ニホンイタチ

計9種

情報不足 (DD)

- ◆ニホンモモンガ
- ◆ヤマネ
- ◆カワネズミ
- ◆ミズラモグラ
- ◆コモグラ(西日本産小型アズマモグラ)
- ヒメヒナコウモリ
- ヒナコウモリ
- ホンドノレンコウモリ

計8種

【記号説明】

- : カテゴリー区分変更なしの種 (12種)
- ↑ : 上位のカテゴリー区分への変更種 (0種)
- ↓ : 下位のカテゴリー区分への変更種 (1種)
- : 新規掲載種 (2種)
- ◇ : 情報不足からの変更種 (1種)
- ◆ : 情報不足への変更種 (5種)

【掲載順の準拠文献等】

世界哺乳類標準和名目録 (日本哺乳類学会)

絶滅 (EX)

食肉目イヌ科

ニホンオオカミ

Canis lupus

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
絶滅 (EX)	絶滅 (EX)	絶滅 (EX)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

絶滅 (EX)

No Image

選定理由

江戸時代の諸国産物帳等に産物として記載されているが、現在は生息しない。

概要

オオカミ *C. lupus* は全北区に広く分布する種であり、亜種ニホンオオカミ *C. l. hodophilax* は日本の本州・四国・九州に分布していた。本種は、オオカミの仲間としては小型で、原始的な形態をしているといわれる。

動物食中心の大型肉食獣であるため、餌動物を狩るための広大な行動圏が必要である。個体群密度はきわめて低く、開発によって生息域が分断されたり餌動物が乱獲された結果、食物や配偶者の確保が困難になったことが絶滅した原因の一つと考えられる。また、伝染病の蔓延とともに家犬との交雑もニホンオオカミ絶滅の原因となった可能性がある。

参考文献

大畑純二 (2006) 島根県産陸棲哺乳類目録。島根県立三瓶自然館研究報告書 4: 7-16。

県内での生息地域・生息環境

江戸時代末まで、中国山地脊梁部あたりに生息していたらしい。享保元文 (1688~1736) 刊『諸国産物帳集成第三巻 (隠岐・出雲・播磨・備前・備中)』に産物として、文政三年 (1820) 刊『石見外記』に狼目撃のかなり詳細な聞き書きの記載があるが、実際にニホンオオカミが生息したことを証明するような頭骨や毛皮などの物的な証拠は、県内では見つかっていない。

存続を脅かした原因

シカやイノシシなど餌となる大型植食動物の減少や、外来畜犬よりもたらされた伝染病等・家犬との交雑の可能性・生息域の分断狭小化による個体群密度の低下等。

(執筆者: 大畑 純二)

絶滅 (EX)

アザラシ目 (鱧脚目) アシカ科

ニホンアシカ

Zalophus japonicus

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
絶滅 (EX)	絶滅 (EX)	絶滅 (EX)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

絶滅危惧 I A 類 (CR)

撮影者 (提供者): 佐藤仁志



選定理由

今は絶滅した可能性が高いニホンアシカが、最後まで生息していたのが島根県であり、竹島を中心に隠岐諸島において多くの生息記録が残されている。島根半島や中海でも昭和20年代まで確認記録があるほか、古くは石見部の海域でも記録がある。本県は、あらゆる意味においてニホンアシカと最も関係の深い県である。

概要

アシカのなかまには、カリフォルニアアシカ、ニホンアシカ、ガラパゴスアシカの3種が知られており、本種は太平洋東西両海岸に分布するアシカの中の日本近海産種とされている。1950年代初期までは島根県竹島・隠岐諸島・島根半島などでその生息情報があるが、その後確実な生息情報がなく、現在本県では絶滅したものと思われる。古くは、本州・四国・九州近海に生息し、島根県の沿岸部の他、津軽・房州・伊豆神津島・相模湾・大阪・淡路島・徳島県・能登七つ島・福岡県などに生息記録が残されている。カリフォルニアアシカによく似ているが、メスの毛色が

参考文献

井上貴央・佐藤仁志 (2024) 中海における「アシカ」の捕獲記録と本庄地区の地引網漁について。島根県立三瓶自然館研究報告, 22, 1-4
井上貴央・佐藤仁志 (2024) 三度地区におけるニホンアシカノ発掘記録とアシカ猟の文献資料。隠岐の島町教育委員会・海士町教育委員会・西ノ島町教育委員会・知夫村教育委員会, 隠岐の文化財, 41, 1-16
井上貴央・佐藤仁志 (2025) 日本海・竹島のアシカ猟 ~1934 (昭和9) 年の取材記録と「中渡瀬アルバム」~。(株)産経新聞出版
中村一恵 (1992) 悲劇の海獣ニホンアシカ。海洋と生物, 14-3
佐藤仁志・井上貴央 (2025) 西ノ島町三度地区におけるアシカの洞穴猟について。隠岐の島町教育委員会・海士町教育委員会・西ノ島町教育委員会・知夫村教育委員会, 隠岐の文化財, 42, 21-34

淡色であることや、歯のサイズが大型であることなどの違いが知られている。しかし、その生態等についての詳しい研究が進んでおらず、未解明の部分が少なくない。春の繁殖期に1頭のオスが数頭から15頭くらいのメスを率いてハーレムをつくり群で生活することや、5~6月に陸上で1頭の子を産むこと、食物としてはイカ・タコ・魚類を好むことなどが分かっている。また、メスや子供は集団で生活するが、オスは非繁殖期に単独又は複数で回遊し、竹島に生息していたオスが隠岐諸島などに渡来していた可能性が高い。また、洞窟を好んで休息場としていたことなども最近の研究で分かっている。

県内での生息地域・生息環境

竹島・隠岐諸島・島根半島・中海などの岩礁や近海に生息していた。古くは石見部の海域でも記録がある。

存続を脅かした原因

狩猟圧、漁網への絡まり、繁殖場の環境悪化など。

(執筆者: 佐藤 仁志)

絶滅 (EX)

食肉目イタチ科

ニホンカワウソ

Lutra nippon

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
絶滅 (EX)	絶滅 (EX)	絶滅 (EX)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

絶滅 (EX)

No Image

■ 選定理由

大正時代には県内各地に生息していたらしい。昭和38年の豪雪時に江の川流域で足跡を見たという不確実情報がある。その後の情報は無い。

■ 概要

日本固有種。本州・四国・九州・対馬に分布。特別天然記念物。本州以南のニホンカワウソを日本本土の固有種とする説や、北海道やユーラシア大陸に産する種と同一であるとする見解がある。河川や湖沼で淡水魚や両生類などを捕食する生活のため、水辺で目撃されることが多かった。海岸に生息するものもいた。おもに、夜行性。1個体が15km前後の範囲内に3～4カ所の泊まり場を持っていて、そこを渡り歩くらしい。水辺だけを移動するのではなく、陸上を別の河川へと移動することもある。本種の食性と広い行動圏から考えると、全国に広く生息していたのだろうが、もともと個体群密度は低かったものと思われる。県内における最近の目撃情報のほとんどが、ヌートリアの誤認である。

● 参考文献

大畑純二 (2006) 島根県産陸棲哺乳類目録。島根県立三瓶自然館研究報告書 4: 7-16。

■ 県内での生息地域・生息環境

隠岐を除く県内各地河川流域に生息していたらしい。享保元文(1688～1736)刊『諸国産物帳集成第三巻(隠岐・出雲・播磨・備前・備中)』や文政三年(1820)刊『石見外記』に本種の記録がある。江の川には「えんこう淵」という名の淵や、支流の濁川には「獺越(おそごえ)」の地名があり、かつて本種が生息していたことをうかがわせる。

■ 存続を脅かした原因

密猟。河岸整備などの河川工事。自然河岸の消失。河川汚濁・汚染。淡水魚の減少。河川周辺の森林破壊。生息域の分断による個体群密度の低下。漁網の設置等。

(執筆者: 大畑 純二)

絶滅 (EX)

偶蹄目ウシ科

ニホンカモシカ

Capricornis crispus

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
絶滅 (EX)	絶滅 (EX)	絶滅 (EX)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—

撮影者(提供者): 大畑純二



■ 選定理由

江戸時代の諸国産物帳に記録があり、明治時代の初め頃には、まだ、中国山地に生息していたらしい。現在、県内には生息していないと思われる。

■ 概要

日本固有種。本州・四国・九州に分布。特別天然記念物。ヤギに比較的近縁の原始的なウシ科動物であり、森林内をおもな生息場所としている。雌雄ともに15cm程度の鋭くがった角を有し、特定のホームレンジ内で単独生活することが多い。おもに樹木の枝や葉を食べる「木の葉食い」である。

■ 県内での生息地域・生息環境

西中国山地あたりでは、「うししか」と呼ばれていた。享保元文(1688～1736)刊の『諸国産物帳集成第三巻(隠岐・出雲・播磨・備前・備中)』によると出雲国産物として「カモシカ」が、また、文政三年(1820)刊の『石見外記』には「走獸部」の項に「羚羊(かもしし)」が記されている。明治時代初め頃には、まだ、西中国山地脊梁部に残存していたようである(一説では、昭和初期まで生息していたとされる)。森林の伐採と造林は必ずしもニホンカモシカの食糧不足を招くことにならず、これだけでニホンカモシカを絶滅に追いやることはできない。ニホンカモシカは、猟犬や野犬などに追われると断崖の狭い岩棚などに逃げ込む。また、冬期には隠れ場所となる崖の岩棚に、1日中、立ちつくしていることがある。この結果、銃猟者には非常にたやすく撃ち取られてしまうことになる。県内からの絶滅は、おそらく、乱獲によるものと思われる。

■ 存続を脅かした原因

乱獲。

(執筆者: 大畑 純二)

● 参考文献

大畑純二 (2006) 島根県産陸棲哺乳類目録。島根県立三瓶自然館研究報告書 4: 7-16。

準絶滅危惧 (NT)

齧歯目リス科

ニホンリス

Sciurus lis

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
情報不足 (DD)	情報不足 (DD)	準絶滅危惧 (NT)

撮影者(提供者): 島根県立三瓶自然館

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

絶滅のおそれのある地域個体群
(LP、中国地方のニホンリス)

■ 選定理由

過去の狩猟統計に「リス類」の捕獲記録が見られるが、ニホンリスか否かは不明。近年、県内の数ヶ所で目撃されている。

■ 概要

日本固有種。本州・四国に広く分布するが、現在は九州での生息確認はない。平地から亜高山帯にまで分布し、低地では松林などを好むとされるが、照葉樹林の動物ではないらしい。昼行性で、早朝と午後に活動する。ドングリやクルミなど堅果類やマツの実などの果実や種子を好んで食べる。

● 参考文献

安藤誠也・小沼仁美 (2022) 島根県東部雲南市におけるニホンリスの発見. 島根県立三瓶自然館研究報告書 20: 35-38.
大畑純二 (2006) 島根県産陸棲哺乳類目録. 島根県立三瓶自然館研究報告書 4: 7-16.
田中 旭・安藤誠也・田村典子 (2020) 島根県西部におけるニホンリスの生息確認. 島根県立三瓶自然館研究報告書 18: 63-66.

■ 県内での生息地域・生息環境

2019年以降、県東部、県中部で死亡個体や写真撮影が散見されている。

■ 存続を脅かす原因

狩猟、森林破壊等。

(執筆: 大畑 純二)

準絶滅危惧 (NT)

翼手目キクガシラコウモリ科

コキクガシラコウモリ

Rhinolophus cornutus

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

撮影者(提供者): 大畑純二

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—



■ 選定理由

現時点で絶滅の恐れは少ないが、生息洞の周辺環境及び洞内環境の変化または破壊・洞穴そのものの破壊等により激減する恐れがある。

■ 概要

日本固有種の可能性が高い。北海道西部から奄美群島まで分布。外観はキクガシラコウモリに似ているが、ずっと小型。「短広翼型」のため狭い洞穴に入ることができる。日中は廃坑や海食洞などの天井に後足で垂下して休息し、夜間に森林内を飛び回って、ユスリカやヤブカなどの非常に小さい飛行性昆虫を捕食する。

● 参考文献

大畑純二 (2006) 島根県産陸棲哺乳類目録. 島根県立三瓶自然館研究報告書 4: 7-16.
大畑純二 (2007) 石見銀山遺跡大久保開歩のコウモリ. 島根県立三瓶自然館研究報告書 5: 15-24.
大畑純二 (2011) 江津市川平廃坑のコウモリ. 島根県立三瓶自然館研究報告書 9: 89-98.
大畑純二 (2017) 島根に生息する2種のキクガシラコウモリ科とユビナゴコウモリ. 島根県立三瓶自然館研究報告書 15: 31-43.

■ 県内での生息地域・生息環境

隠岐(西ノ島)を含む県内全域に分布。海食洞や自然の岩穴、貯蔵穴、廃坑などで休息・冬眠する。200頭以上の冬眠コロニーが見られる洞穴もある。

■ 存続を脅かす原因

洞穴環境の変化や破壊、洞穴周辺の森林破壊等。生息洞穴への不用意な入洞。農薬等化学物質の体内蓄積も懸念される。

(執筆: 大畑 純二)

準絶滅危惧 (NT)

翼手目キクガシラコウモリ科

キクガシラコウモリ

Rhinolophus ferrumequinum

カテゴリ区分

2004	2013/2014	2026
準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

撮影者(提供者):大畑純二

島根県固有評価

-

環境省カテゴリ

-



選定理由

現時点で絶滅の恐れは少ないが、生息洞の周辺環境及び洞内環境の変化または破壊・洞穴そのものの破壊等により激減する恐れがある。

概要

国内では北海道中西部から屋久島まで分布。ユーラシア南部を東西に広く分布する。日本産の小翼手目としては大型で、翼を広げた長さは30cmほどになる。「短広翼型」コウモリのため体が大きいわりに小回りができ、狭い洞穴にでも入ることができる。日中は洞穴の天井などに後足で逆さにぶら下がって休息し、夜になると活動する。森林内などを飛びながら夜行性の飛行性昆虫を捕食する。外気温が10℃以下になると冬眠する。1産1仔。小型の哺乳類としては異例に長寿で、野生で20年以上生存した例がある。

参考文献

- 大畑純二 (2006) 島根県産陸棲哺乳類目録。島根県立三瓶自然館研究報告書 4: 7-16。
 大畑純二 (2007) 石見銀山遺跡大久保間歩のコウモリ。島根県立三瓶自然館研究報告書 5: 15-24。
 大畑純二 (2011) 江津市川平廃坑のコウモリ。島根県立三瓶自然館研究報告書 9: 89-98。
 大畑純二 (2017) 島根に生息する2種のキクガシラコウモリ科とユビナゴコウモリ。島根県立三瓶自然館研究報告書 15: 31-43。

県内での生息地域・生息環境

県内全域に分布。海食洞や自然の岩穴、貯蔵穴、廃坑で休息・冬眠。

存続を脅かす原因

洞穴環境の変化や破壊、洞穴周辺の森林破壊等。生息洞穴への不用意な入洞。農薬等化学物質の体内蓄積も懸念される。

(執筆: 大畑 純二)

準絶滅危惧 (NT)

翼手目ヒナコウモリ科

モモジロコウモリ

Myotis macrodactylus

カテゴリ区分

2004	2013/2014	2026
準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

撮影者(提供者):大畑純二

島根県固有評価

-

環境省カテゴリ

-



選定理由

現時点で絶滅の恐れは少ないが、生息洞の周辺環境・洞穴の破壊等により激減する恐れがある。1洞当たりの生息数はあまり多くないが、各地の廃坑や洞穴で見られ、目撃はそれほど困難ではない。

概要

北海道から奄美大島までと対馬、サハリン、ロシア沿海地方、朝鮮半島に分布。日中の休息や冬眠は、洞穴などで単独で行い、夜、森林内や林冠部などを飛び回って小型の昆虫類を捕食する。

参考文献

- 大畑純二 (2006) 島根県産陸棲哺乳類目録。島根県立三瓶自然館研究報告書 4: 7-16。
 大畑純二 (2007) 石見銀山遺跡大久保間歩のコウモリ。島根県立三瓶自然館研究報告書 5: 15-24。
 大畑純二 (2011) 江津市川平廃坑のコウモリ。島根県立三瓶自然館研究報告書 9: 89-98。
 大畑純二 (2016) 島根のモモジロコウモリとテングコウモリ。島根県立三瓶自然館研究報告書 14: 19-26。

県内での生息地域・生息環境

隠岐諸島を含む県全域に分布。海食洞、廃坑、利用されていないトンネルなど各地で見られるが、ふつう一度に見られるのは1~数頭程度である。繁殖期には50頭位のコロニーが見られることもある。

存続を脅かす原因

生息洞穴環境の変化や破壊、洞穴周辺の森林破壊等。生息洞穴への不用意な入洞。農薬等化学物質の体内蓄積も懸念される。

(執筆: 大畑 純二)

準絶滅危惧 (NT)

翼手目ヒナコウモリ科

ユビナガコウモリ

Miniopterus fuliginosus

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—

撮影者(提供者):大畑純二



選定理由

現時点で絶滅の恐れはないが、生息洞（特に冬眠洞と繁殖洞）及び森林など採食空間等の環境変化や破壊によって、激減する恐れがある。

概要

アフガニスタン・インド・中国などに分布。国内では本州・四国・九州・対馬・佐渡などに生息する。日本産のコウモリのうち最大の集団を形成する種で、冬眠時には数千頭、繁殖期には数万頭のコロニーを形成することがある。森林などの上を高速で飛行しながら飛行性昆虫を捕食する。

参考文献

- 大畑純二 (2006) 島根県産陸棲哺乳類目録。島根県立三瓶自然館研究報告書 4: 7-16。
 大畑純二 (2007) 石見銀山遺跡大久保間歩のコウモリ。島根県立三瓶自然館研究報告書 5: 15-24。
 大畑純二 (2011) 江津市川平廃坑のコウモリ。島根県立三瓶自然館研究報告書 9: 89-98。
 大畑純二 (2017) 島根に生息する2種のキクガシラコウモリ科とユビナガコウモリ。島根県立三瓶自然館研究報告書 15: 31-43。

県内での生息地域・生息環境

県内全域。停空飛翔ができないため、比較的大きな洞穴を好む。廃坑や、夏には海食洞などで見られる。県東部海岸には、4～5万頭の繁殖コロニーが形成される海食洞がある。冬眠には別の洞穴が利用されている。

存続を脅かす原因

生息洞の環境変化と破壊及び洞穴周辺の生息環境の変化と破壊。繁殖洞や冬眠洞などへの不用意な入洞。農薬等化学物質の体内蓄積も懸念される。

(執筆: 大畑 純二)

準絶滅危惧 (NT)

翼手目ヒナコウモリ科

テングコウモリ

Murina hilgendorfi

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—

撮影者(提供者):大畑純二



選定理由

もともと生息数が多くない。県内では冬眠洞が2～3カ所知られているのみで、1年間に1～5頭が目撃されている程度である。

概要

北海道・本州・四国・九州、サハリン、ロシア沿海地方、朝鮮半島に分布。日本産を亜種や別種として分ける研究者もいる。

県内での生息地域・生息環境

隠岐諸島を除く県内。現在、県中部の4カ所で生息が確認されており、洞穴内で冬眠している個体が観察されている。出産や育仔は樹洞で行われると思われるが、県内では報告例がない。森林内を飛翔しながら昆虫類を捕食し、日々の休息はおもに樹洞で行われるものと思われる。廃坑などの内壁のくぼみや発破の穴にもぐって冬眠していることがある。

存続を脅かす原因

休息や冬眠するための洞穴環境の変化と破壊、樹洞のある大径木が茂る森林の消失。周辺の森林環境の破壊。農薬等化学物質の体内蓄積も懸念される。

(執筆: 大畑 純二)

参考文献

- 大畑純二 (2006) 島根県産陸棲哺乳類目録。島根県立三瓶自然館研究報告書 4: 7-16。
 大畑純二 (2007) 石見銀山遺跡大久保間歩のコウモリ。島根県立三瓶自然館研究報告書 5: 15-24。
 大畑純二 (2011) 江津市川平廃坑のコウモリ。島根県立三瓶自然館研究報告書 9: 89-98。
 大畑純二 (2016) 島根のモシロコウモリとテングコウモリ。島根県立三瓶自然館研究報告書 14: 19-26。

準絶滅危惧 (NT)

翼手目ヒナコウモリ科

コテングコウモリ

Murina silvatica

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

撮影者(提供者):大畑純二

島根県固有評価

-

環境省カテゴリー

-



選定理由

過去、県内の数カ所で見撃例があるが、目撃個体数は少ない。

概要

外観はテングコウモリに似るが、ずっと小型。北海道から屋久島・隠岐諸島・対馬、サハリン、ロシア沿海地方、朝鮮半島に分布。日本産を亜種とする研究者もいる。休息や繁殖の場所として樹洞を利用して洞穴内には入らないが、山間部では、捕食のために民家や家畜舎に入ることがある。他県では、蔓に付いたままのクズなどの枯れ葉にくるまって休眠していた例が報告されている。また、広島県八幡高原では、雪中で「冬眠」していたコテングコウモリが見つかっている。

参考文献

大畑純二 (2006) 島根県産陸棲哺乳類目録. 島根県立三瓶自然館研究報告書 4: 7-16.

県内での生息地域・生息環境

隠岐諸島を含む県内の森林に生息。過去、隠岐(西ノ島)と三瓶山地域・匹見川中流域での生息確認がある。

存続を脅かす原因

休息と冬眠のための樹洞がある大径木が生育するような森林の破壊。農薬等化学物質の体内蓄積も懸念される。

(執筆: 大畑 純二)

準絶滅危惧 (NT)

食肉目クマ科

ツキノワグマ

Ursus thibetanus

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	準絶滅危惧 (NT)

撮影者(提供者):島根県中山間地域研究センター

島根県固有評価

-

環境省カテゴリー

絶滅のおそれのある地域個体群 (LP、西中国地域のツキノワグマ)



選定理由

平成6年度に絶滅の恐れがあるという理由で狩猟による捕獲が禁止された。2020年代に入ってから、人里への出没が多発している。県内のほぼ全域(隠岐を除く)で目撃数が増加、生息数が増加傾向にあるように思われる。

概要

国内では本州・四国・九州、国外では台湾、インドシナ北部、ロシア極東地域、中国東北地方、朝鮮半島などに分布する。昆虫や蜂蜜、動物の死骸を食べたり、ごくまれに大型草食獣を捕食することがあるが、植物食が中心で、堅果類や球根・塊根・草本類の地上部など多量の植物を食べている。果樹園や飼養ミツバチへ被害を与えたり、時に、人畜に危害を加えることがあり、有害獣・危険動物として駆除の対象となることがある。冬眠中に産する。

参考文献

大畑純二 (2006) 島根県産陸棲哺乳類目録. 島根県立三瓶自然館研究報告書 4: 7-16.

県内での生息地域・生息環境

おもに中国山地脊梁部に分布し、夏緑樹林帯をおもな生活域としている。近年は、里地域を徘徊してカキやクリなどの果樹園に食害を及ぼすことがある。ツキノワグマの冬眠は、おもに大木の地上よりかなり高い位置にある樹洞で行われるが、大木の根元の土穴や岩穴、大きな倒木の下など地上で行われることもある。造林地内で冬眠する個体も見られる。近年になって大木の茂る森林が少なくなってからは、地上部での冬眠が増えているかもしれない。冬眠期以外の季節に、中国山地脊梁部から遠く離れた平地や、時に海岸付近にまでやって来ることがあるが、この移動の全てが、食物不足や生息環境の破壊によるものかは不明。近年、隠岐を除く県内全域で、広く目撃がされている。

存続を脅かす原因

有害獣駆除。

(執筆: 大畑 純二)

準絶滅危惧 (NT)

食肉目イタチ科

ニホンイタチ

Mustela itatsi

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—

撮影者(提供者):大畑純二



選定理由

過去に比べて、生息地・個体数ともに減少している。

概要

日本固有種。本州・四国・九州・屋久島などに分布し、近年は北海道にも侵入。導入飼育されたチョウセンイタチ(シベリアイタチ)が野生化し、おもに西日本で分布を広げており、ニホンイタチを駆逐していると言われているが詳細は不明。

参考文献

大畑純二(2006) 島根県産陸棲哺乳類目録、島根県立三瓶自然館研究報告書 4: 7-16。

県内での生息地域・生息環境

県内全域に分布。隠岐諸島は自然分布か否か不明。かつては、水田や池や川などの水辺周辺でよく目撃された。近年は水田の減少や溜池の消失、河川環境の変化などによって生息環境が悪化している。県内でもチョウセンイタチは分布を広げて集落伝いに山間部にまで侵入しており、平野部ではニホンイタチがほとんど見られなくなっている。

存続を脅かす原因

水辺環境の変化と減少。チョウセンイタチとの競合。

(執筆: 大畑 純二)

情報不足 (DD)

齧歯目リス科

ニホンモモンガ

Pteromys momonga

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	情報不足 (DD)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—

No Image

選定理由

西中国山地のブナ帯に生息しているが、目撃例はきわめて少ない。森林環境の悪化による絶滅が危惧される。

概要

日本固有種。本州・四国・九州に分布。本種はブナ帯から亜高山帯の針葉樹林にかけて分布するとされている。樹木の葉や芽・花などのほか、昆虫や鳥類の卵を食べる。繁殖のため小鳥用の巣箱を利用することがある。夜行性で樹上性。

参考文献

大畑純二(2006) 島根県産陸棲哺乳類目録、島根県立三瓶自然館研究報告書 4: 7-16。

県内での生息地域・生息環境

西中国山地の標高800m以上の夏緑樹林に生息するがくわしい生息状況は不明である。他県では標高500m以下でも生息が確認され、標高だけで生息域を推定できないことがわかった。

存続を脅かす原因

森林の破壊。森林の分断による個体群の孤立・狭小化。

(執筆: 大畑 純二)

情報不足 (DD)

齧歯目ヤマネ科

ヤマネ

Glirulus japonicus

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	情報不足 (DD)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—

撮影者(提供者):島根県立三瓶自然館



選定理由

発見例は局地的で少なく、ほとんどが冬眠時に偶然に見つけられたもの。森林環境の悪化による絶滅が危惧される。

概要

本州・四国・九州・隠岐諸島に分布し、平地から亜高山帯にまで生息。日本固有属固有種。天然記念物。虫食中心の雑食性と考えられる。全国的には冬眠や飼育生態等についての情報量はかなり多いが、野生での生態や分布の情報は非常に少ない。

参考文献

大畑純二(2006) 島根県産陸棲哺乳類目録、島根県立三瓶自然館研究報告書 4: 7-16。

県内での生息地域・生息環境

県内では、おもに隠岐(島後)と本土側西部山地で冬眠個体の発見例があり、発見は偶然的。生態や分布範囲等の詳細は不明。発見例の多くが「里山」的な環境である。

存続を脅かす原因

里山を含めた森林環境の破壊と、森林(生息域)の分断による個体群の孤立・狭小化。殺虫剤等の体内蓄積も懸念される。

(執筆: 大畑 純二)

情報不足 (DD)

真無盲腸目トガリネズミ科

カワネズミ

Chimarrogale platycephalus

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)	情報不足 (DD)

撮影者(提供者):大畑純二

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—



選定理由

河川流域を住み場所としているため、護岸改修や水質汚染・汚濁等による生息環境の悪化によって、生息数と生息地の急速な減少が心配される。

概要

本州・四国・九州に分布。日本固有種。半水生生活で、溪流に面した石垣や岩礫の間等に巣を営み出産し、移動や捕食はおもに溪流を泳いで行う。水生昆虫やカエル、溪流魚などを捕食し、時に、ヤマメなどの養魚場に大きな被害を及ぼすことがある。

参考文献

大畑純二 (2006) 島根県産陸棲哺乳類目録。島根県立三瓶自然館研究報告書 4: 7-16.

県内での生息地域・生息環境

かつては、隠岐諸島を除く県内各地の河川流域にふつうに生息していたが、河川改修などによって岸や川床までもがコンクリートで固められたり、餌となる小魚や水生昆虫が減少して、本種の生息数や生息地も減少している。

存続を脅かす原因

河川改修及び水質汚染と汚濁、河川周辺の森林環境の破壊。生息域の分断による個体群の孤立・狭小化。農薬等化学物質の体内蓄積も懸念される。

(執筆者:大畑 純二)

情報不足 (DD)

真無盲腸目モグラ科

ミズラモグラ

Oreoscaptor mizura

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
情報不足 (DD)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	情報不足 (DD)

撮影者(提供者):大畑純二

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

準絶滅危惧(NT)



右から2つ目

選定理由

生息数が少なく、生息地が限定されていると考えられる。県内での情報はほとんどない。

概要

日本固有種。本州のみに分布し、山岳地帯に生息するとされる。中国地方の他県では広島県と鳥取県で確認されているが、生息確認地点は少なく、発見個体も多くない。県内産は、亜種ヒワミズラモグラに属するものと考えられる。

参考文献

大畑純二 (2003) 島根県で初めて生息が確認されたコモグラとミズラモグラ。島根県立三瓶自然館研究報告書 1: 3-8。
大畑純二 (2006) 島根県産陸棲哺乳類目録。島根県立三瓶自然館研究報告書 4: 7-16。
大畑純二 (2013) 三瓶山北の原で採集されたミズラモグラ。島根県立三瓶自然館研究報告書 11: 55-58.

県内での生息地域・生息環境

2000年に三瓶山でキツネの糞中から1個体分の骨と毛が発見され、2012年には完全な姿の死体が採集された。広島県境付近等にも生息する可能性があるが、現時点では三瓶山が県内唯一の生息地である。三瓶山の生息地は既知の生息地から遠く離れている。

存続を脅かす原因

生息地の開発。個体群の孤立・狭小化。農薬等の体内蓄積も懸念される。

(執筆者:大畑 純二)

情報不足 (DD)

真無盲腸目モグラ科

コモグラ(西日本産小型アズマモグラ)

Mogera imaizumii

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
情報不足 (DD)	準絶滅危惧 (NT)	情報不足 (DD)

撮影者(提供者):大畑純二

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—



右側

選定理由

現在知られている県内での生息地点は3カ所。目撃や生息に関する情報はほとんどない。

概要

日本固有種。本州・四国に分布。中国地方では広島県と山口県にも生息。近年は、コモグラという亜種を認めないでアズマモグラに含める学者が多い。しかし、中四国産はアズマモグラとは別種の可能性があるため、県内産はコモグラ(西日本産小型アズマモグラ)としておく。

参考文献

大畑純二 (2003) 島根県で初めて生息が確認されたコモグラとミズラモグラ。島根県立三瓶自然館研究報告書 1: 3-8。
大畑純二 (2006) 島根県産陸棲哺乳類目録。島根県立三瓶自然館研究報告書 4: 7-16.

県内での生息地域・生息環境

1995年に出雲平野西部南端付近で収集されたのが県内の初記録。その後、三瓶山北の原と江の川中流域西側付近で1カ所ずつ採集例がある。分布域の詳細は不明だが、本土側全域に分布している可能性がある。

存続を脅かす原因

生息地の開発。個体群の孤立・狭小化。農薬等の体内蓄積も懸念される。

(執筆者:大畑 純二)

情報不足 (DD)

翼手目ヒナコウモリ科

ヒメヒナコウモリ

Vespertilio murinus

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
-	-	情報不足 (DD)

撮影者(提供者): 島根県立三瓶自然館

島根県固有評価

-

環境省カテゴリー

情報不足(DD)



選定理由

県内では1例のみの確認に留まっているが、これが迷行個体なのか、個体群が存在するのかが不明なため注視する必要がある。

概要

本種はヨーロッパやロシアに分布し、国内では2002年に礼文島で最初の個体が確認された。その後、北海道で繁殖集団が確認された以外は青森県、石川県での偶発的な発見に留まっている。ヨーロッパなどでは1000km以上移動する個体がいることが知られている。

参考文献

安藤誠也・前田喜四雄 (2021) 島根県におけるヒメヒナコウモリ(*Vespertilio murinus* Linnaeus, 1758)の初確認。島根県立三瓶自然館研究報告 19: 39-42.

県内での生息地域・生息環境

2019年に県央において1個体のみが確認された以外は情報がない。

存続を脅かす原因

本種は高高度を飛翔するとされ、風力発電のブレードとの接触が懸念される。

(執筆者: 安藤 誠也)

情報不足 (DD)

翼手目ヒナコウモリ科

ヒナコウモリ

Vespertilio sinensis

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
-	-	情報不足 (DD)

撮影者(提供者): 島根県立三瓶自然館

島根県固有評価

-

環境省カテゴリー

-



選定理由

隠岐で1例、県央で1例の確認に留まっており、個体群が存在するのかが注視していく必要がある。

概要

国内においては北海道、本州、四国、九州まで広く分布している。屋根裏や人工物の隙間などで出産子育てを行うことが知られている。冬眠場所については、夏のねぐらと違うところに移動することが多くあまり知られていない。長距離を移動する個体がいることが知られている。

参考文献

安藤誠也・石田麻里・畑瀬 淳・上野吉雄 (2024) 島根県の本土側において初めて捕獲されたヒナコウモリ(*Vespertilio sinensis*)とその誘引方法について。島根県立三瓶自然館研究報告 22: 49-57.

県内での生息地域・生息環境

現在のところ不明であるが、2022年に県央で捕獲した個体は標高約550mの山地で得られている。隣県においては都市部の人工物の隙間でも確認されていることから、今後、県内の市街地でも確認される可能性がある。

存続を脅かす原因

本種は高高度を飛翔するとされ、風力発電のブレードとの接触が懸念される。

(執筆者: 安藤 誠也)

情報不足 (DD)

翼手目ヒナコウモリ科

ホンドノレンコウモリ

Myotis bombinus

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
情報不足 (DD)	情報不足 (DD)	情報不足 (DD)

撮影者(提供者): 大畑純二

島根県固有評価

-

環境省カテゴリー

絶滅危惧Ⅱ類(VU)



選定理由

全国的に生息洞・生息数はきわめて少ない。県内では、毎年秋から冬にかけて1~数頭が目撃されていたが、現在は見る事ができない。

概要

ヨーロッパ西部からアフリカ北部・アジア東部などに分布。国内では北海道・本州・四国・九州に分布。冬眠は、洞穴の壁面にあるくぼみやクラック・発破の穴などで単独で行う。

参考文献

大畑純二 (2006) 島根県産陸棲哺乳類目録。島根県立三瓶自然館研究報告書 4: 7-16.

県内での生息地域・生息環境

過去、県中部の使われていなかったトンネルで、毎年9月に1~5頭が目撃できていた。1998年頃からはトンネルが改修され使用されるようになり見られなくなったが、2025年に再確認された。

存続を脅かす原因

生息洞穴の環境の変化と破壊。洞穴周辺の森林破壊。生息洞への不用意な入洞。農業等の体内蓄積も懸念される。

(執筆者: 大畑 純二)

絕滅
野生絕滅

絕滅
危險 I 類

絕滅
危險 II 類

準
絕滅
危險

情報
不足